

戦間期のソ連西北部国境における民族問題とスターリンの政策

——フィンランドとレニングラード、カレリア——

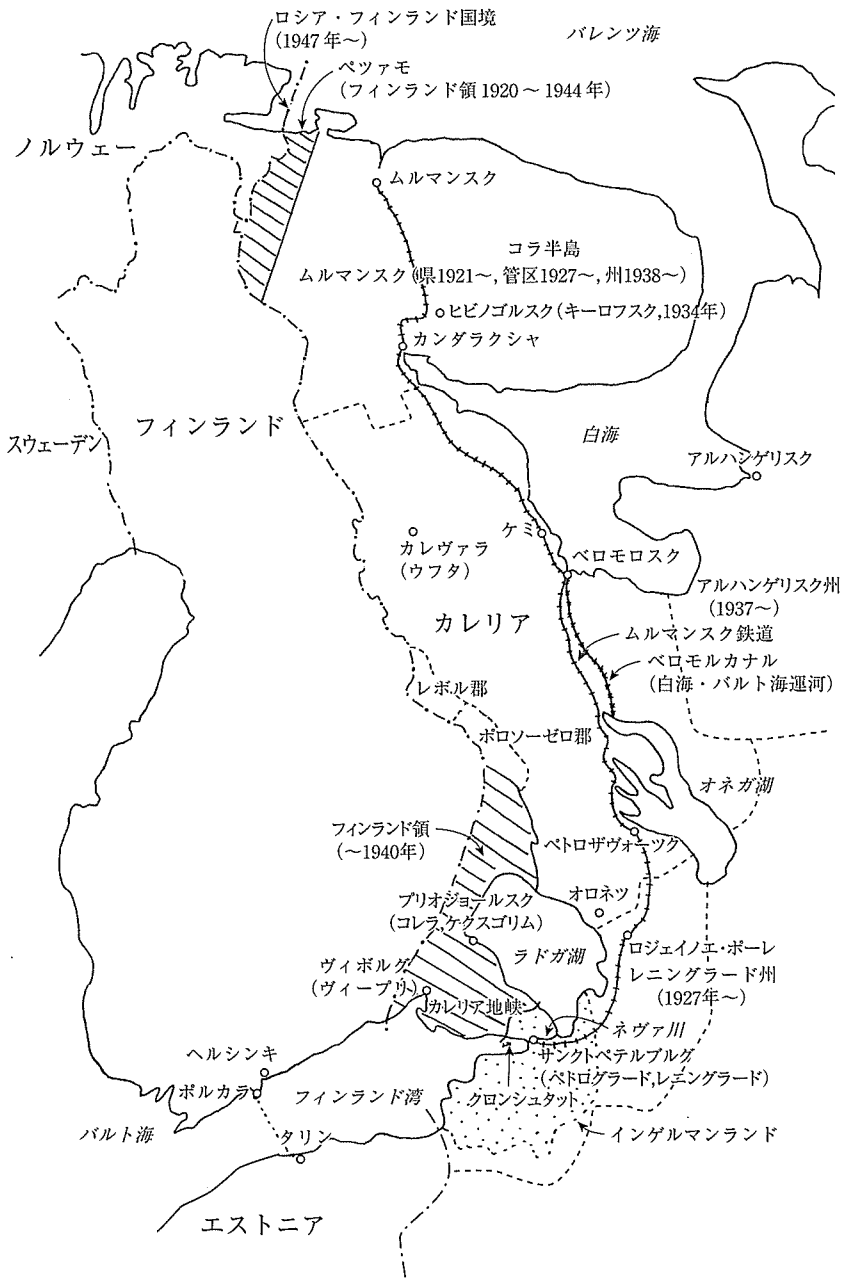
寺 山 恭 輔

【要旨】 フィンランドと国境を接するソ連西北部（カレリア、レニングラード）は、歴史的にフィン系民族が居住する地域であった。ロシア革命後、一〇〇年以上ロシアの統治下にあったフィンランド大公国は独立を果たすが、一九世紀後半以来広まっていたフィン系住民統合を主張する民族主義を背景に、ロシアの混乱に乗じた民族統一、領土拡張の動きが独立直後のフィンランドから生じた。一九二〇年代に推進された非ロシア人居住地域におけるコレニザーツィア（現地化）政策によりカレリア、レニングラードのフィン系住民は言語教育等、文化的な自由をある程度享受したが、ソ連に対する軍事的脅威が強まる一九三〇年代には次第にコレニザーツィア政策は廃止され、フィン系住民に対しては民族主義的偏向を理由とした弾圧が強化されるようになる。特に国境を跨いだフィン系住民同士の接触を阻止すべく、国境周辺の住民は強制移住等、苛酷な弾圧を被ることになった。

史林 九〇巻一号 二〇〇七年一月

はじめに

戦間期のソ連にとって、モンゴルや一時期の中国の新疆地区など敵対的でない隣接国・地域は、緩衝地帯となり安全保障上の負担は軽減されたが、ソ連全体の国境地帯を見渡せば、このような地域はむしろ例外であり、ソ連指導部はソ連体制を敵視する資本主義国から包囲されているという考えにとらわれていた。第二次大戦後の冷戦時代にも基本的な認識は



変らないが、大戦という苦境を契機に、戦間期の安全保障上の不利な状況を克服しようとした結果、周辺に親ソ政権を樹立していくことで、地政学的にはむしろソ連にとって好ましい状況が形成された。本稿は上述のように、戦間期にソ連を「包囲」していた国の一つであるフィンランドと国境を接する西北部国境地帯、すなわちカレリア地方およびレニングラード州（一九二七年より、それまでペテルブルグ県、ペトログラード県、レニングラード県と変遷）を対象に、同地域の民族問題に焦点をあて、フィンランド（同じくフィン系のエストニア人が居住する隣国エストニアも関係する）を念頭に、スターリン指導部がいかなる統治政策を実施したのかについて考察することを課題とする。この地域にはフィン系民族が国家をまたいで居住するという国境地帯によくみられる特徴を有している。歴史もある程度共有する同系統の民族が隣接して居住していれば、ソ連体制を脅かす思想、物資、人間等もろもろの否定的要素がソ連内部へ浸透するのは容易である、と強く警戒したのが、「包囲」下の国境地帯に向けたスターリンの眼差しであった。したがって、緩衝地帯を周囲に配置できていない戦間期の国境隣接地域でこれらの否定的要素の浸透を防ぐべく、国境から遠い他の地域にもまして住民の肅清や強制移住を厭わない断固たる政策をスターリン指導部はとったのであり、まさに本稿が対象とするフィンランド国境地帯もその例外ではない。本稿は長大なソ連国境のわずかな部分を切り取って分析するに過ぎないが、「包囲」下の国境地帯に対するソ連指導部の共通した対策を検証するケース・スタディーとしての意味も持っている。

最初に、近年蓄積が進みつつあるこの地域の歴史研究を紹介しておきたい。戦間期のカレリアについてキーリンが主として軍政的な観点から興味深い著作を発表した^①。いわゆる「カレリア問題」の歴史についてウトキンがまとめているが、新しい研究であるにもかかわらず、戦間期の問題についてはこれまでのソ連公式史学をかなり踏襲しているとの印象を受けた^②。カレリアに関する文書集^③、論文集^④も出ているが、特に後者には参考になる論考が多数掲載されている。ムサーエフは、ソ連時代の歴史学には言及されることのなかったインゲルマンランドについて、初めてのまとまった研究を発表しており^⑤、本稿はキーリンの著作と並んでこの著書に多くを依拠している。革命直後のインゲルマンランドについてはタルギ

アイネンがまとめ^⑥、主として今日のインゲルマンランド人に対する弾圧についてはギリディが告発している。ソ・フィン両国の一九二〇—三〇年代における関係について、ルバーソフがロシア外務省の新たな史料を駆使して考察しているが、^⑧彼は別の共著で戦間期におけるソ・フィン国境をめぐる両国のやり取りについてもまとめている。ソ・フィン関係に関する論文集も出版されている。^⑩ロシアからフィンランドへの亡命者の問題に関するフィンランドの歴史家ネヴァライネンの著作もロシア語に翻訳されている。^⑪帝政ロシア出身の軍人で革命後のフィンランド軍を指揮し、第二次大戦後には大統領にも就任したマンネルヘイムに対するロシア国内における関心も高く、近年多数の著作がロシア語で発表されている。^⑫スターリンとフィン人という本もフィンランド語からロシア語に訳されているが、内容はソ連との関係からみたフィンランド史である。^⑬帝政ロシアの首都ペテルブルグとフィンランドの関係に関する研究も多い。本稿では言及しないがソ・フィン間の戦争、いわゆる冬戦争についても近年多数の著作、史料集が出版されている。

戦間期の約二〇年にわたる変化に富んだ歴史について、短い文章でまとめることは無謀であると承知しているが、本稿では新たに史料を発掘するというより、ロシア語による出版に限られてはいるが、これらの新たな研究を検討することで、この地域特有の民族問題とそれに対するソ連当局の政策の概要を明らかにできればと考える。^⑮

① Юри́й Ки́пин, *Карелия в политике советского государства, 1920-1941*, Петрозаводск, 1999. キーリンはロシアの外交、治安関係のアルヒーフ（公文書館）史料ばかりでなく、フィンランドの軍や警察アルヒーフでも調査し、フィンランドがカレリアの状況について把握していた度合いについても言及している。一九八九年にはフィンランド軍参謀本部アルヒーフの諜報史料も解禁されたという。フィンランド警察の基本的な情報源はソ連から出国、逃亡した人々からの聞き取り調査であった。彼がこれまでの研究から抜け落ちていたものとして特に注目したのは、一九二〇—三〇年代のレニングラード軍管区に

おける軍事計画、ソ連西北部、特にカレリアにおける軍事インフラの構築、ソ連軍が立案した諸フランに占めるこの地域の地位、フィンランドとの戦争準備などである（там же, с.13）。

② Н.И.Уткин, *Россия-Финляндия: карельский вопрос*, Москва, 2003.

③ *Независимая Карелия, 1920-1940*, Петрозаводск, 1997, *Независимая Карелия, 1941-1956*, Петрозаводск, 1999.

④ Тимо Вихавайнен, Ирина Такала рел., *В семье единой: Национальная политика партии большевиков и ее осуществление*

な *Северо-Западе России в 1920-1950-е годы*, Петрозаводск, 1998.

- ㉔ В.И.Мусаев, *Политическая история ингерманландии в конце 19-20 веков*, Санкт-Петербург, 2004. ロンミアから亡命者の回想。フィンランドの研究著者による著作などではこれまでで発表されていなかったが、本書はフィンランド内の公文書館の史料を利用して書かれた最初のインゲルマンランド史に関する研究である。本書は前著 on же, *Ингерманландский вопрос в XX веке*, Санкт-Петербург, 1999. の増補改訂版でもある。インゲルマンランド・フィンランド語の「シムルキナ」は事典の解説 Н.В. Шлыгина, *Финны-ингерманландцы, Народы России: Энциклопедия*, Москва, 1994, 372-373. を参照のこと。一九九〇年にフィンランドが、ソ連内に居住するフィンランド人にフィンランドへの定住権を賦与する決定をしたあとにフィンランドへ帰国したインゲルマンランド・フィンランド語で同じ「シムルキナ」が「オムスラ」である。Н.В. Шлыгина, *Финские репатрианты из бывшего советского союза на исторической родине, Исследования по прикладной и неологической этнологии*, no.168, Москва, 2005. ソ連海沿岸のフィンランド系住民について彼女が編集に加わった次の著作を参照のこと。Е.И. Климентьев, Н.В. Шлыгина *отв. ред., Прибалтийско-финские народы России*, Москва, 2004.
- ㉕ М.А. Тартиннен, *Ингерманландский излом: Борьба ингерманландских финнов в гражданской войне на Северо-Западе России (1918-1920гг.)*, Санкт-Петербург, 2001.
- ㉖ Л.А.Гилья, *Судьба «социально-опищенного» народа: засекреченный геноцид финнов в России и его последствия. 1930-2002 гг.*, Санкт-Петербург, 2003.
- ㉗ А.И. Рупасов, *Советско-финляндские отношения: середина 1920-х-начало 1930-х гг.*, Санкт-Петербург, 2001.
- ㉘ Рупасов А.,Чистиков А.Н., *Советско-финляндская граница 1918-1938гг.*, Санкт-Петербург, 2000.
- ㉙ *Россия и Финляндия в XIX-XX вв.*, Санкт-Петербург, 1998., *Россия и Финляндия в XX веке*, Санкт-Петербург, 1997.
- ㊱ Пекка Невалайнен, *Изгой: Российские беженцы в Финляндии 1917-1939 гг.* Перевод с фин. на рус. М. Леппя.-Санкт-Петербург, 2003., *Он же, Исход: Финская эмиграция из России 1917-1939гг.*, Санкт-Петербург, 2005.
- ㊲ 例として一九〇五年のフィンランドへ、彼らに送られた四つの著作が出版された。Л.В. Власов, М.А. Власова, *Маннергейм и Голыш, Санкт-Петербург, 2005.*, Алексей Шкаров, *Генерал-лейтенант Маннергейм: Рожден для службы царской...* (Депонировать каваларийских полков из послужного списка барона Маннергейма), Санкт-Петербург, 2005., Энеонора Иоффе, *Лития Маннергейма: Письма и документы Тайны и открыты*, Санкт-Петербург, 2005., Власов Л., *Женщины в судьбе Маннергейма*, Санкт-Петербург, 2005.
- ㊳ Тийо Вихавайнен, *Стиали и финны*, Санкт-Петербург, 2000.
- ㊴ ベテルブルグの目抜き通りネフスキー通りに面した中心部にはドイツ・スウェーデン、フィンランドのルター派教会を中心とする区画があるが、その歴史と今日における宗教的復活に関するイヴァノフの著作がある。Максим Иванов, *Люттеранский квартал в Петербурге*, Санкт-Петербург, 2004. 戦間期のリンネングラード周辺のルター派教会の歴史について各地の教会のリスト、関連文書を含めてシカロフスキーらがまとめた。М. Шкаровский, Н. Черепенина, *История Евангелическо-лютеранской церкви на Северо-Западе*

Росси (1917-1945 гг.), Санкт-Петербург, 2004. 特に革命前のベテルブルグにおけるフィンランド人の生活について詳述したフィンランドの歴史家エンクマンの研究が、スウェーデン語から訳されている。Макс Энгман, *Финляндцы в Петербурге*, Санкт-Петербург, 2005. ベテルブルグとヘルシンキの関係に関する次の論文集もある。*Санкт-Петербург-Хельсинки. Хельсинки-Санкт-Петербург, 1809-2004*, Санкт-Петербург, 2005.

一 フィンランド国境の画定とインゲルマンランドの形成

最初に、ロシアとフィンランド国境がいかに形成されたのか、簡単にまとめておきたい。フィンランドはスウェーデンの強い影響下にあったが、ロシアのノヴゴロド公国が勢力を伸張させると東西キリスト教勢力が争う場となり、一三一一四世紀には戦争が続いた。スウェーデンが一二九三年にカレリア地峡のフィンランド湾に面した場所にヴィボルグ（ヴァイプリー）を建設したのに対抗し、ロシアはコレラ（テクスゴリム、現在のプリオジョールスク）を建設した。一三三三年両国がオレホフの和議（バヒキナサーリ条約）を結び、史上初めてスウェーデン、フィンランド、ロシア三国間の国境が画定され（北部のラップランドは国境未画定）カレリア地方が二分された結果、東カレリア（フィンランドとの国境から東側にある部分、ロシアではたんに「カレリア」）はロシア領に属することになった。一六世紀末にもロシア・スウェーデンは数次にわたる戦争したが、それに続く一七世紀初頭のロシアにおけるスムータ（動乱）時代の両国間の戦争の結果、一六一七年にスウェーデンとロシアの和議が結ばれ、ロシアはカレリア地峡とラドガ湖北部、ネヴァ川、フィンランド湾南部地域を失った。スウェーデンが新たに獲得した領土をインゲルマンランドと名づけたため、そこへフィンランドから入植させた人々はインゲルマンランド・フィン人と呼ばれる。ロシア年代記によると、このフィンランド湾南部地域には九世紀以来、他のフィン系住民（чудь、чути、чюдь、вошь、вошчи、икхора、ижора等）が居住し、スラブ系住民と接触したことにより正教化していたが、

⑮ 主としてカレリアと北部のムルマンスク地方について、満州事変との関連で検討を加えたことがある。一九九〇年代前半までに出たこの地域に関する研究、特にペロモルカナル（白海バルト海運河）の建設と関連した強制収容所の拡大と囚人労働、カレリアにおける農業集団化等については本稿で紹介する余裕がないので、この拙稿も参照していただきたい。拙稿「一九二〇—一九三〇年代のカレリア、ムルマンスク」『西洋史学論集』第三四号（一九九六年）、八四—九八頁。

スウェーデン統治時代にはヴィボルグなどから移住が増え、ルター派教会の数も増えた。さらに一七世紀半ばのスウェーデン・ロシア戦争（一六五六一一六五八年）もフィン人の移住と現地住民のルター派への改宗を進めた。一七世紀末の大飢饉で正教徒の他所への逃亡が加速した結果、同時期には四万から四・五万のインゲルマンランド住民のうちルター派が七割を占めるまでになっていた^①。

ロシアが喪失した土地の国防上、貿易上の戦略的重要性を認識したピョートルは対スウェーデン戦争に勝利し、奪取したネヴァ川河口で一七〇三年よりサンクトペテルブルグの建設に着手した。さらに北上したロシア軍によりフィンランド各都市は陥落し、一七一四年から二一年にかけてフィンランドは一時的にロシアの支配下に入ったが、一七二一年のニスタド条約によりフィンランドはスウェーデンに返還される一方、ヴィボルグ、ケクスゴリムを含むカレリア地峡とラドガ湖北部のカレリアはロシア領となった（エストニア、リヴォニアもロシア領に編入）。この間ペテルブルグは一七〇八年、インゲルマンランド県（一七一〇年よりペテルブルグ県、以後「インゲルマンランド」という名称は公式には使われなくなる。一九世紀半ばよりペテルブルグ県は八郡より構成、うち五郡が歴史的にインゲルマンランドの土地とみなされる。本論で以下にインゲルマンランドと言及するとき、この故地を意味する）の中心となり、一七二二年にはロシアの首都となった。ロシア領に取り戻したピョートルはインゲルマンランドにおけるロシア化を、時には強制的な移住策により実行した。

一七四一年の戦争でもスウェーデンに勝利したロシアは、再度フィンランドを占領するが、スウェーデンの支配下で伝統的にルター派を信仰するフィンランド統治に固執せず、一七四三年のオーボ条約でフィンランドを返還する。ただしその東南部だけをヴィボルグ県として自国領に編入した。ナポレオン戦争時代の一八〇八年にロシアはフィンランドに進駐し、翌一八〇九年のフレドリクスハムの条約でスウェーデンからフィンランドを割譲された。アレクサンドル一世は自らフィンランド大公となり、フィンランド大公国の支配を始めるが一八二二年にロシアは、ヴィボルグ県をフィンランド大公国に編入している。この状態で一九一七年のロシア革命を迎えることになる。カレリア地峡の大部分を含み、ロシアの

首都ペトログラード（一九一四）に近接したヴィボルグ県がフィンランド領内に入ったまま独立したことが、ロシアにとって安全保障上の問題を引き起こすことになる。

一八世紀前半に優勢だったインゲルマンランドにおけるフィン人の割合は、一八世紀末にロシア人と同等になり、一九世紀半ばには圧倒されることになる。^③しかしフィン人自体の人口増も著しく、ペテルブルグ県には一八四八年段階で七九、六九三人、一八九七年の国勢調査では一三〇、四二三人が居住していた。一方イジヨラ人の人口変動は少なく一九世紀半ばから二〇世紀初めにかけて一万余千人にとどまり、ヴォチ人はイジヨラ人への同化が進んだため二〇世紀始めに一、〇〇〇人程度にとどまった。ペテルブルグ県はフィン系のエストニアと接するが、その人口は一七六三年の約四、五〇〇人から一八九七年の六四、一一六人へと急増しており、一九世紀末のペテルブルグ県の人口二一一万のうち、エストニア人を含むフィン系人口は二万人、約一〇％を占めていた。フィン系住民の多くは農民で、一九世紀末のペテルブルグ市に住む二一、六五六人のフィン人のうち一七、六〇五人はフィンランド大公国民であった。インゲルマンランド・フィン人はカレリア地峡南部地域に集中し、同地域の二郡で約四万人を数え、主として牧畜、野菜栽培、馬車輸送、御者、漁業などに従事していた。^④

ニスタド条約後もルター派教会の活動が許されていたインゲルマンランドでは、フィンランドから多数の牧師が派遣され（一八一〇—六五年の間に活動した九五人の牧師のうち約八〇人はフィンランド出身者）、民族学校の数は初めての初等学校が一七八二年に設立された後、一九一一年に二二九、一九一八年に三一四へと増加した。裕福な家庭はヴィボルグのリツェイ（貴族学校）やヘルシンキ大学へ子弟を入学させた。一八七〇年代よりペテルブルグでは様々なフィン語新聞が発刊される一方、一九世紀後半にはフィン人による諸団体も結成され、第一次大戦前夜には約三〇団体を数えた。ところが一九世紀末から強化され始めたフィンランド大公国内におけるロシア化政策同様、二〇世紀初めにはロシア本国でも学校における言語教育について議論が続き、フィン語の新聞発行にも検閲が適用され始めた。^⑤

以上の通り、フィンランドから移住しベテルブルグ周辺で主として農業に従事していたフィン人をインゲルマンランド・フィン人と呼ぶが、スウェーデンとの国境分割以来、一貫してロシア側（東カレリア）に住み、ロシア正教を信奉するフィン語系住民カレリア人とは、異なる歴史的経過を辿ってきたことがわかる。カレリア語に文字はなく、フィン語との相違は大きい。

国境で分断されているフィン系民族を統合しようとするフィンランド国内のカレリア、インゲルマンランド併合論、いわゆる「大フィンランド」構想は、フィンランドの学者リョンロートがカレリア地域で伝承詩を収集し、一八三五年に『カレワラ』を出版したことに起源を見出せる。以後、この地域にフィンランドと同系統の民族が居住しているとの認識が広まり、カレリア民族が保持する文化的・精神的豊かさに関する研究を行う運動「カレリア・ルネッサンス」が二〇世紀初頭のフィンランドで活発化した。一九〇五年の第一次ロシア革命以降、カレリアでも諸団体が結成された。南北カレリア間の交通は不便で交流が少なく、北部に行くほどフィン語に近く、方言の差が大きかった。カレリア南部ではロシア人と接触する機会が多く、ロシア正教の影響が強かったが、白海沿岸のカレリア人の中にはフィンランドとの商取引に従事する行商人が多く、一九〇七年のピーク時にその数は約二、〇〇〇人に達した。すべての学校は一九一七年までロシア語で教育を受けていた。^⑥

① Н.И. Уткин, указ соч., с.18-23, В.И. Муравев, указ соч., с.13-21. スウェーデンとサンクトペテルブルグ及びインゲルマンランドの関係について、双方の公文書館にある史料を確認しようとする作業も行われている。Санкт-Петербург и Ингерманландия в архивах Шведии, Швеция в архивах Санкт-Петербурга, Санкт-Петербург, 2005. チュチは今日ヴェeps Венцаと呼ばれる民族で、一九一七年までの公式の名称であった。このヴェepsについてもその著名な研究者でありながら、スターリン時代に肅清されたマカリエフ С.А.

Макарьев (1895-1937) を記念して一九九五年に開催されたコンファレンスでの報告が出版されている。Венцы: история, культура и межэтнические контакты. Сборник научных трудов, Петрозаводск, 1999.

② Уткин, указ соч., с.24-54.

③ 一七三二年の調査によればインゲルマンランドに住む五八、九七九人の農民のうち二、一九八六人がルター派教徒、すなわちフィン人、一四、五一一人がイジョラ人、五、八八三人が古くから住むロシア人、

一〇、四五七人が移住してきたロシア人であった (Мусаев, указ. соч., с. 25.)。

④ Мусаев, указ. соч., с. 25-30. ベテルブルグ市外の農村に住むフィンランド大公国民は一一一九六人にすぎなかった。

⑤ Там же, с. 35-59.

⑥ Клипп, указ. соч., с. 18-21, указ. соч., В семье единой, с. 11, 91, 133. 「大フィンランド構想」の中でも、同じフィン・ウゴル系民族としてウラル地方に居住する民族 (ウドムルト、コミなど) まで含めようとする考えは少数派であった。

二 ロシア帝国の崩壊と一九二〇年のタルトゥ講和条約

一九一七年のロシア革命後、フィンランドやバルト三国は独立を果たした。「大フィンランド」構想を信奉する民族主義者がフィンランドに存在する一方で、ロシア国内のフィン系住民にも民族自治の拡大や、フィンランド或いはエストニアとの統合を求める動きが存在した。これらの主張は一樣ではなく、ロシアとフィンランド国境にまたがる地域で運動が展開したこと、特にソヴィエト体制が固まるまでの流動的な状況の中で、ボリシェヴィキ体制に異を唱える白系運動 (Белое движение) や干渉国の動向とも絡んで様々な形で現れたが、一九二〇年にソヴィエト・ロシアとフィンランドがタルトゥ講和条約を締結し、革命後の混乱を收拾して、戦間期の国境が画定されることになる。

ロシアでボリシェヴィキが権力を握ると、スヴィンヒューヴド政権のフィンランドは一九一七年一二月に独立を宣言、ソヴィエト・ロシアもそれを承認した^①。しかしその政策に反対する社会民主党はヘルシンキに革命政権を樹立、内戦が始まった。ドイツとのブレスト・リトフスク講和でフィンランドからの撤兵を義務づけられたソヴィエト・ロシアは内戦に干渉せず、敗れたフィンランド革命政権指導者は一九一八年四月末にヴィープリ (ヴィボルグ) を脱出し、ペトログラードへ向かった。彼らは約五、〇〇〇人に上りペトログラード県の主としてフィン語の話される農村に住み、プロバガンダを行った。一九一八年八月にモスクワでフィンランド共産党が設立大会を開き、^② 同党のフィン語による新聞、週刊誌の発行がペトログラードで始まると同時に政治宣伝部 (一九一九年末にペトログラードへ移動) が活動した。彼らフィンランドか

らの亡命共産主義者、通称「赤いフィン人」がその後のカレリアで指導的地位につくことになる。^③

（二） フィンランドによるカレリア併合の試み

独立フィンランド政府は「大フィンランド」構想をもとにカレリアへ部隊を送り、領土の併合を試みた。最初の行動はフィンランド内戦の最中、「赤いフィン人」がカレリアでフィンランド軍を背後から攻撃していることが理由であった。同時に彼ら「赤いフィン人」がレーニンと交渉し、フィンランド革命成就の際には、クロンシュタット要塞を脅かすフィンランドの要塞イノと交換に、バレンツ海への出口ペツアモをフィンランドに引き渡すこと、さらに東カレリアで譲歩することを約束したことも影響した。一九一八年三月にフィンランドは東カレリア併合のために部隊を送り四月にケミを占領した。ウフタ（今日のカレヴァラ）に同年秋までとどまった（フィンランド軍の占領に反対するカレリア住民からなる「カレリア軍」に攻撃されて撤退）マリムの報告には、住民の冷淡な反応が記されていた。住民にとつては赤白の問題よりも誰が食料を供給してくれるのが重要であった。カンダラクシャ方面に向かった部隊は「赤いフィン人」の部隊に撃退されて退却した。

この時期のカレリアはフィンランド、ソヴィエト・ロシアの他に、ムルマンスク、アルハンゲリ斯克を拠点にドイツ軍と対抗していた英国を中心とする連合国軍、一九一八年一月の革命まで存在したドイツ軍、ボリシエヴィキに敵対するロシア白衛軍といった諸勢力が混在し、利害対立のため状況は錯綜していた。連合国はフィンランドのカレリア進撃をそれと関係の深いドイツ軍の攻撃ととらえ、部隊と軍需物資の輸送路であったムルマンスク鉄道への攻撃を恐れたし、ドイツもブレスト講和締結後のフィンランドによる東への領土拡大を望まなかった。一方で、少なくともコラ半島からの連合国軍の撤退という点で利害の一致したドイツ、フィンランド、ソヴィエト・ロシアは、実行には移されなかったものの一九一八年八月に連合国軍に対する共同行動に合意したといった諸例からも状況の複雑さはいかがえよう。またロシアの白

衛軍は帝政時代からの一体的領土保全を重視して独立・分離に反発し、反ポリシェヴィキで一致しながらカレリア、インゲルマンランドの独立的志向を快く思っていなかった。

カレリア領内では一九一八年八月、レボル郡の住民集会が三〇年間の兵役免除、経済的権限の確保などを条件に自発的にフィンランドへ統合することを決議、代表がスヴィンフーヴドと会見し認められた。フィンランドへ逃げたカレリア人やフィンランド人義勇兵が一九一九年一月に占拠したポロソーゼロ郡でも、同様に住民代表がフィンランドへの併合を宣言したが、赤軍の圧力で義勇兵は退却した。特にフィンランドの食料確保にとって魅力的な農業地帯であるオロネツ地区への進軍を、一九一九年四月初めにフィンランド政府が決定、当初一、〇〇〇人だった義勇兵は三、〇〇〇人に増え、現地住民一、〇〇〇人も加わった。オロネツ、ロジェイノエ・ポーレを奪取するが、最重要都市ペトロザヴォーツク進撃の前に、英軍、そしてフィンランド軍が占拠した土地の返還を求めるロシア白衛軍との協力がならず敗北、八月までに退却を余儀なくされた。住民の冷淡さを原因の一つとみるものもある。唯一の成果はフィンランドの組織グループがポロソーゼロ郡で自治組織を形成し、一九一九年六月の集会でロシアからの独立とフィンランドへの併合を決議したことである。以後、カレリア問題は武力ではなく交渉による解決へ移された。パリ講和会議で一九一九年七月にフィンランド代表がカレリア問題の解決を提起した。同年一〇月二日には連合国軍が完全にムルマンスクより去った。一方、北部に残ったロシア白衛軍との電話連絡という名目でフィンランドは北部に部隊を派遣し、一九二〇年二月一〇日、白衛軍の抵抗もなくペツアモを占領した。これを受けてポリシェヴィキも軍事行動を急ぎ、同年二月二〇日アルハンゲリスキに進軍、三月半ばまでにポリシェヴィキはムルマンスクを含む北部ロシアを完全に統制下においた。

その後一九二〇年六月八日に自治を広く認める「カレリア労働コミュニティ」^④が設立されるが、その理由として、同年三月にフィンランド・ポーランド間で検討されていた軍政同盟を強く懸念し、フィンランドとの和解を早く進めたかったこと、一九二〇年四月にレーニンの招きでスウェーデンからロシアに來た赤いフィン人の指導者ギューリングの主張にレー

ニンが賛成したことが考えられている。フィンランド政府が五月末に、六月一〇日からタルトゥで和平交渉に入るよう提案しロシアも合意していたが、この交渉を有利に進めるためにもカレリアで住民に自治権を与えるよう促す声がポリシェヴィキ政権にも存在した。その主唱者チチエーリン外務人民委員は、カレリア住民への自決権の賦与その他を大々的に報道することなどを政治局に提案し実行に移された。最終的に決められたカレリア労働コミューンの領域内では、カレリア人が六〇%と過半数を占めていた。一九二〇年一〇月一四日に締結されたタルトゥ講和条約の結果、フィンランドはレボル郡、ポロソーゼロ郡の併合をあきらめるかわりに、北部のペツァモ地区を自国領としてロシアに認めさせた^⑤。かくしてフィンランド史上初めて、念願の大洋への出口を握ることになるが、結局それはわずか二〇数年の歴史にとどまった。

（二）インゲルマンランドの場合

既に述べた通り、一九世紀末からインゲルマンランド知識人の活動は活発化していたが、二月革命後の一九一七年四月にインゲルマンランド・フィン人は二〇〇人の代表からなる大会を初めて開催した（九月に第二回大会）。学校におけるフィン語教育の導入等を訴えた中央委員会を選出し、チュニンを議長に選出したが、全体的にはメンシェヴィキ、トルドヴィキ（農民とナロードニキ知識人の派閥）への支持が強かった。地方ゼムストヴォ（自治体）への働きかけが功を奏しフィン語を話す教師の数は増えた（一九一一年には二六二人中一三三人だけだったが、一九一八年には二四八人へ）。次いで一九一八年三月の第三回大会では、先の中央委員会に代えて一〇人で構成する「インゲルマンランド民族ソヴィエト」を設立した。ところがポリシェヴィキ政権はその活発な活動を好ましく思わず、ある新聞は一九一八年初めに、インゲルマンランドのフィン語教師はソヴィエト体制の転覆とフィンランドへのインゲルマンランド併合を画策しているとの記事を載せて活動を牽制した。徐々にインゲルマンランド人は自治組織より排除され、ペトログラードのフィン語新聞はその他の非ポリシェヴィキ系新聞同様、廃刊に追い込まれた。カレリア同様、一九一八年春にフィンランド軍がカレリア地峡南部を一時的

に占領し、そこで反ソ的なプロパガンダをインゲルマンランド人に対して行つたことも関係する。行政的な自治権の拡大を目指すインゲルマンランド人にボリシェヴィキが否定的な態度をとつたのは、「ブルジョア・フィンランドへの潜在的な『第五列』」として彼らに不信任を抱き、またインゲルマンランド農民にはロシア人農民に比べ貧農が極めて少なく、富裕農民が多数を占めているためインゲルマンランド人の地方自治組織は『クラーク（富農）的』であるとみなしていたからである」とムサーエフは述べている。一九一八年にはペトログラード県で農民反乱が頻発（三—一〇月に四八件を記録）した。

インゲルマンランド人の大部分は政治に無関心であり、これ以後、小規模ながら政治運動に従事していくのは、一九一八年の農民反乱鎮圧後にフィンランドとエストニアに亡命した北部、西部インゲルマンランドの亡命者グループであった。チュニンも一九一九年二月にボリシェヴィキからの圧力を避けフィンランドへ逃げた。一九一八年末、フィンランドには二二〇—三〇〇名のインゲルマンランド亡命者が存在したといわれるが、一九一八年一月、ヴィボルグに集まつた彼らがインゲルマンランドとフィンランドの統合という考えを初めて打ち出した。フィンランド政府への呼びかけの中にはインゲルマンランド北部のみフィンランドに統合し、その他についてはロシア国内での自治を要求するにとどめるという案もあった。一九一九年一月末にはインゲルマンランド統治臨時委員会が設立され、フィンランド政府に支持を求めた。武器、資金を獲得してインゲルマンランドをボリシェヴィキから解放することが目的であつた。

バルト海からのロシアの排除を主張するなど強硬であつたスヴィンフーヴド首相が一九一八年一月、ドイツの敗戦とともに退陣すると、新たに摂政位についたマンネルヘイムはロシアの反革命勢力への協力を第一義的に考え、インゲルマンランドに対してはより現実的に対応し、ペトログラードを攻撃するとしてもロシアの白衛軍と連合国の支持がともに得られる場合に限定した。一九一九年四月に進撃したカレリアと人口の稠密なペトログラード方面では状況が異なるのは確かであろう。マンネルヘイムは一九一九年五月—六月に白衛軍の西北戦線のリーダーであるユデーニチ將軍と交渉し、締結した

協定の中で、インゲルマンランドについては母語の使用、信教の自由、地方自治の実施などを定めていた。しかしカレリア同様、白衛軍にとつてはロシアからの分離を主張するインゲルマンランド人の主張は許容できず、ペトログラードへ部隊を組んで進撃を始めたものの意見の相違から分裂し、進撃自体もボリシェヴィキに阻まれインゲルマンランドの武力解放はならなかった。^⑦

① フィンランド史については、百瀬宏『北欧現代史』山川出版社、一九八〇年を参照した。

② *Комитет и Финляндия, 1919-1945*, Москва, 2003.

③ Мусев, указ. соч., с. 77-80. カンガスプロは「ロシアへ亡命した赤いフィン人の数について一般的にはアプトンが主張する六〇〇〇〇人が採用されることがあるが、サアレルの主張する約一〇、〇〇〇人という数字がより近」と述べている。Маркку Кангаспуо, Финская эпоха Советской Карелии, в указ. соч., *В семье единой*, с. 123-160.

④ 四月末にポーランド軍がロシア攻撃を開始するが、五月一日政治局は「計画されている連合国の第二の干渉」問題について検討し、特に「革命軍事会議とペトログラードの同志はポーランドの進撃と関連

し、英国の関与のもとでフィンランド側から生ずる脅威に注目すること。ペトログラードの同志はペトログラード全体を軍隊風にし、いつ何時でも攻撃してくる敵に対して、すべてを動員できるような完全な軍事的準備を再興せねばならぬ」と決定した。Рукасов, Чистиков, указ. соч., *Советско-финляндская граница*, с. 62-63.

⑤ Кипин, указ. соч., с. 23-55. タルトゥ条約の内容については、*Документы Внешней Политики СССР*, том. 3, Москва, 1959, док. 137, 138.

⑥ Мусев, указ. соч., с. 61-76.

⑦ Там же, с. 77-171.

三 カレリア蜂起と一九二〇年代のコレニザツニア政策

タルトゥ条約でフィンランドと和解したソヴィエト・ロシアは、内戦にも終止符を打ち、一九二一年からは新経済政策のもとで国内建設に専念することになる。カレリアにおいて推進されたコレニザツニア（коренизация 現地化）政策を中心に、ボリシェヴィキ当局の民族政策についてまとめたい。最初にカレリアとインゲルマンランド（ペトログラード県、後のレニングラード州の領域の大部分と重なる）両地域におけるフィン系住民の人口構成の変化を表すデータを紹介しておく。単位は異なるが、【表1】がカレリア、【表2】がレニングラード州及び同市の人口構成の変化を示す。全国的な人口調査

表1 カレリアにおける人口構成の変化^①(単位人, () 内は%を示す。)

民 族 名		1926年	1933年	1939年
ロシア		153,967 (57.2)	224,445 (60.2)	296,529 (63.2)
フィン		2,544 (0.9)	12,088 (3.2)	8,322 (1.8)
カレリア		100,781 (37.4)	109,046 (29.3)	108,571 (23.2)
ヴェプス		8,587 (3.2)	8,307 (2.2)	9,388 (2.0)
その他すべて		3,457 (1.3)	18,748 (5.1)	46,088 (9.8)
う ち	ウクライナ	708 (0.3)	9,552 (2.6)	21,112 (4.5)
	ベラルーシ	555 (0.2)	1,898 (0.5)	4,263 (0.9)
	ポーランド	413 (0.2)	656 (0.2)	3,345 (0.7)
	ドイツ	117 (0.04)	623 (0.2)	3,280 (0.7)
	タタール	198 (0.07)	2,015 (0.5)	3,088 (0.7)
	モルドヴァ	82 (0.03)	1,181 (0.3)	2,269 (0.5)
	ユダヤ	623 (0.2)	1,011 (0.3)	1,917 (0.4)
全人口		269,336 (100.0)	372,634 (100.0)	468,898 (100.0)

は一九二六年と一九三九年に実施されたが、カレリアについては一九三三年のデータも存在する。ともにこの時期を通じてロシア人が多数を占める傾向が強まり、フィン、カレリア、ヴェプス、エストニアといったフィン系民族の比率はほぼ一貫して減少していることが確認できる。

かつてのソ連史学で「カレリア冒険主義」、フィンランドでは「カレリア人の民衆蜂起」と呼ばれる事件が、タルトゥ条約調印から約一年後の一九二一年末から二年初めにかけて勃発し、両国関係は悪化した。

事件は主としてタルトゥ条約調印後にフィンランドに逃れていたカレリア人約二、五〇〇人と、第一次大戦中にドイツで軍事教育を受けていたイエーガー(ヤーカリ)隊員二八名を含むフィンランドの義勇兵五〇〇人が国境を越えてカレリアに進入してカレリアのほぼ半分の地域を占領し、タルトゥ条約をソヴィエト・ロシアが履行しないことを国際連盟に訴えたことに始まる。内戦とその間の戦時共産主義政策の影響で地域経済が壊滅的状况に陥り特に食料が手に入らないことが最大の原因であった。ヴェチエカ(ВЧК ≡ 反革命・サボターージュ取締り全ロシア非常委員会)の外国部(ИНО)はカレリアを分離しフィンランドに併合するという、汎

表2 レニングラード市、レニングラード州における人口構成の変化^②（単位千人、（ ）内は%を示す。）

民族名	1926年		1939年	
	州	市	州	市
ロシア	936.7 (79.7)	1,386.9 (86.2)	2,935.3 (90.6)	2,776.0 (87.0)
フィン	119.1 (10.1)	6.8 (0.4)	106.7 (3.3)	7.9 (0.2)
エストニア	50.5 (4.3)	15.8 (1.0)	44.5 (1.4)	15.2 (0.5)
ヴェプス	12.9 (1.1)	—	15.6 (0.5)	……
ドイツ	8.3 (0.7)	16.9 (1.1)	12.8 (0.4)	10.1 (0.3)
ラトヴィア	6.5 (0.6)	12.9 (0.8)	11.6 (0.4)	……
ユダヤ	3.7 (0.3)	84.8 (5.2)	17.7 (0.5)	201.5 (6.3)
ウクライナ	2.3 (0.2)	10.8 (0.7)	36.5 (1.1)	54.7 (1.7)
ベラルーシ	2.3 (0.2)	14.6 (0.9)	13.2 (0.4)	32.4 (1.0)
タタール	1.9 (0.2)	7.3 (0.5)	11.9 (0.4)	31.5 (1.0)
その他	31.1 (2.6)	53.4 (3.3)	35.0 (1.1)	62.1 (1.9)
全人口	1,175.3(100.0)	1,609.8(100.0)	3,240.7(100.0)	3,191.3(100.0)

フィンランド主義がより大きな役割を果たしたとみなしていたが、紛争終結後になされたゲベウ（Tüü // 国家政治保安部、ヴェチエカの後身）による「客観的な報告」（キーリンの意見）には、一九二一年春に木材伐採を拒否した住民をカレリア労働コミュニケーション当局が武力で弾圧したことが遠因でフィンランドの影響は小さいと記されていた。カレリア当局も蜂起鎮圧後の一九二二年春、民族的な要求を考慮せず普通のロシアの県と同様の施政を行ったことで白衛派の影響力浸透を許したと、同様に事態を総括した^③。ソヴィエトの軍当局と同じく、フィンランド軍との衝突を懸念したチチエーリン外務人民委員は、革命軍事会議長トロツキーに、度々事態の早期収拾を訴えた。チチエーリンはフィンランドをポーランド、エストニア、ラトヴィアなど周辺諸国との防衛同盟締結に走らせることを特に心配していた。革命ロシアは特に新聞用紙の供給をフィンランドに完全に依存しており（一九二〇年代後半、特にドイツからの紙の調達が始まりフィンランドへの依存が軽減されるまで状況に変化はなかった）、穀物輸送（主として合衆国からの援助）にもフィンランドの港を利用していたために、フィンランドとの断交は検討されたものの断念せざるを得ないという事情があった。フィンランド政府は公式には事態に非介入の立場をとり、同国内

にもロシア攻撃への賛意は少なかつた。

一九二二年一月三日、ロシア共産党中央委員会政治局は軍事行動を開始することに加え、①カレリアではフィンランドブルジョアジーのカレリア労働者への襲撃に対する抗議のキャンペーン、情報戦争を開始すること、②ロシアの代表も参加する委員会に国境侵犯グループの武装解除、武器の引渡しを求めること、③ロシアの諸紙は、カレリアの冒險主義ヘフィンランドブルジョアジーが参加していることに關する新たな事実を掲載し、反フィンランドキャンペーンを行うこと、④フィンランドに賠償を請求すること、以上を決定した。この蜂起の遠因は經濟問題にあるとロシアの治安機關が分析していたにもかかわらず、この政治局決定は、この問題を利用してフィンランドに対する圧力、国内のイデオロギー統制を狙つたものとみなせよう。三万人の赤軍部隊が派遣され、蜂起部隊は一九二二年二月にフィンランド領内へと退却した。カレリア北部では一万から一万二、〇〇〇人がフィンランド領内へ移つたが、ロシア当局は最大一〇%強が蜂起の参加者で、残りは蜂起に参加しておらず、赤軍の圧力で逃亡したか、或いは無理やり連行された人々であると推定していた。越境者の半数が、その後ロシア領に帰還したといわれる。フィンランド国内では避難民に対する特別の收容所が設置され、学校の設置など各種援助が施された。この避難民の中には一九二一年三月のクロンシュタット要塞における反ボリシエヴィキ蜂起への参加者も含まれていた。

政治局は先の決定と並んで「強力な内部情報者網」の確保について決議し、一九二二年八月までにゲベウはカレリアの国境地帯（キーリンは国境から四〇km地帯と推定）に二六人の諜報部員と一一人の通報者、蜂起者が活動した後方地区に七八人の通報者、ペトロザヴォーツクや他の地区にも諜報員四人、通報者二〇一人を確保した。これは地域住民の氣分を詳しく知ることが目的であつた。帰国者のうち蜂起に活発に参加したとみなされた者への監視も続けられた。

その後、一九二五年一月には住民の蜂起に対する懸念が最高潮に達し、部隊の配備等真剣な対応がなされたこともあつたが、結局は杞憂におわつた。「カレリアの蜂起は、ロシア・ソ連の指導部がその後何年にもわたつて忘れることのでき

ない教訓となった。モスクワの中央権力、或いは現地ペトログラード当局は蜂起の鎮圧後、信用できない、ソヴィエト政権に忠誠を誓わない、ソ連の西部国境で戦争が勃発する際には潜在的な『第五列』となりうる民族としてカレリア人に対して接した」とキーリンは述べるが、「第二次世界大戦が始まるまでカレリアのゲペウ・エヌカヴェデ（НКВД 内務人民委員部）と党の地区委員会は、カレリア諸地区、ことにカレリア人の居住する地区の軍事・経済状況を報告する際に、この蜂起への参加人数を示していたが、それは地区ごとの具体的な信頼性を評価する物差しとなっていた」とすれば、それもうなずけよう。^④この前史が後述する一九三〇年代の国境地帯におけるフィン系住民への弾圧、肅清と深く関係してくることになる。

蜂起の鎮圧後、ソ・フィン関係は新段階へ入ったが、タルトゥ条約締結の際に約束した住民への自治、住民投票の実施をロシア政府が怠っているとみなすフィンランド政府が抗議を続けたのに対し、条約自体にはそれが明記されておらず、声明にとどまっているとするロシア政府に反論され、フィンランドは国際連盟の常設裁判所に持ち込めなかった。ただし連盟総会は一九三三年九月二四日、東カレリア問題の重要性に鑑み、ソ連の連盟加盟後に問題に立ち返ることをフィンランドに通知した。^⑤

一方ロシア国内で、カレリアにおける民族問題再発の防止策として採られたのがフィン化である。これはフィン語に国語としてのステータスを与え、学校でのフィン語授業への移行、フィン語によるカレリア住民への文化活動の実施などを意味するが、蜂起鎮圧直後の一九三三年三月六日、党中央委員会組織局がこの政策の開始を決定した。一九二〇年代はロシア人以外の民族が居住する地域で同様のコレニザーツィア政策（一九三三年四月の第二回党大会で定式化）が採用されておりカレリアに限った問題ではない。ところが、地元の党委員会では、カレリア住民に対してロシアから分離する大きな可能性を与えるものであるとの反対派意見が多数を占めた。「ならず者による蜂起の成果であるにとられかねない」譲歩であるというのである。また、カレリアの将来構想に関しては民族間の意見対立も垣間見える。三グループの考えの相違

を分析しているある治安機関要員の報告によると、ギューリングラ「赤いフィン人」は、中央政府を有しロシア・フィンランド両国の緩衝国家たるカレリア共和国の樹立を想定し、カレリア民衆の頭越しに将来のプロレタリア化したフィンランドへ統合することを意図しているのに対し、最も数の少ないカレリア人の党幹部はロシアに外交その他のかなりの権限を残した上でカレリア労働コミュニティを維持することをめざし、最大数を誇るロシア人の党活動家は西部のカレリア人居住地域をフィンランドに割譲した上で、残りの地域をソヴィエト・ロシアに連邦の一部として編入することを目指していた、という。^⑥

中央から派遣された活動家の説得で対立は鎮められ、フィン化は実行に移された。さらにカレリア労働コミュニティは一九二三年七月二五日、カレリア自治ソヴィエト社会主義共和国へと格上げされたことで、「赤いフィン人」の立場は強化されることになった。^⑦ただしフィン化はカレリア化とも異なる。カレリアでは文字の読める住民（九一％）のうち七一％がロシア語を読めたにもかかわらず、カレリア全土でフィン語を通用語にしようとした。ロシア語住民にもフィン語教育を行った。既述の通りカレリア語には文字がなかったが、そのカレリア文字を作るのではなく、隣国のフィン語の文章語を採用しようとした点でカレリアの言語政策は他の地域と異なっていた。^⑧

戦略的な観点からカレリア開発に関して複数の軍人や政治指導者から提案されたのは、ムルマンスク鉄道から国境方面へ鉄道、或いは戦略道路を建設することであった。一九二一―二三年の紛争時に部隊の移動が困難であったことも理由に含まれるが、結局は大々的な資金投入は回避された。苦しい経済事情以外に、一九二三年一〇月のドイツ革命失敗後、ソヴィエト当局はフィンランドを敵対国家からはずし、以後ポーランド、ルーマニアを主要な敵国とみなしてウクライナ、白ロシア軍管区の強化に乗り出したためである。ボリシェヴィキ政権の権力基盤が強化されたこともあり一九二六年にカレリア問題はそれまでのソ・フィン関係の懸案ではなくなり、国境も正常化し国境協定も延長された。

一九二〇年代後半には第一次五カ年計画によるカレリア開発問題が検討される。最大の柱はムルマンスク鉄道の活用で、

カレリアの豊富な資源である木材の輸出、製紙工場の建設などが構想された。人口の希薄なカレリアへ大々的な移住策も検討されたが、フィンランドとの対立に深刻さが薄れたため、中央は連邦資金の投入を回避した。事業を担当する人民委員部の意向に任せたが、同様に資金のかかるカレリアへの労働力輸送を嫌った。そして最後に残ったのが囚人労働力の利用である。一九二九年六月六日ソ連政府はオゲベウ（ОГЕВУ 合同国家保安部、ゲベウの後継組織）に対し、社会的危険分子を隔離するために収容所を建設して労働に従事させるよう命じた。かくして木材伐採への囚人労働の利用が開始され、ベロモルカナル（白海・バルト海運河）建設へも転用されることになる。その収容所人数が最大となった一九三八年四月一日時点で、一三九の収容地点に八三、八一〇人の囚人と三、七三七人の自由雇用労働者が働いており、カレリアの中で独立した別個の経済体制が維持されていたことになる。

一方で「赤いフィン人」を中心とするカレリア指導部は、ロシア人の流入を避けるべくフィン系住民で労働者を補おうとしていた。カレリアの主要産業である製材業の中心カレルレスやその他の企業には一九二九年のアメリカ大恐慌を契機に職を求める北米のフィン人労働者や困窮したフィンランドからの越境者、モスクワ近郊のフィン系民族トヴェリ・カレリア人等から少なくとも七五％は採用するよう促していた。しかし実際には移住者の七五％をロシア人が占めるというまったく逆の現象が生じていた。【表一】にある通り、一九三三年までにロシア人の割合は三％増えて六〇％となり、フィン人は五倍の一・二万人に増加したが主として北米フィン人によるもので、約五、〇〇〇人いたとされるフィンランドからの越境者はカレリア当局が市民権を与えようと欲したにも関わらず、オゲベウは非合法者として木材切り出しのためのラーゲリへ収容した^⑩。

一九二七年はソ連国内で列強がソ連への攻撃を企図していると大々的にキャンペーンされた年であった。具体的に指示も出され、労働国防会議は一九二七年八月二〇日、連邦的意義を有する大工場（冶金工場、電気技術、科学、皮革、繊維など戦時の避難が困難なもの）の建設を禁じる国境地域を確定することにしたが、一九二八年二月に策定された当初プランにレ

ニングラード、白ロシア、ウクライナなどとも含まれていたカレリアは、同年四月の最終案で削除された。これはこの時期のフィンランドがソ連の国防に対して持つ危険性のバロメーターでもあるといえよう。実際、二年後の一九三〇年九月二日に将来の戦争に備えて策定された同様の国境地帯の発展計画には、カレリアも含まれることになる。これは一九二九年一月から始まったラプア運動のようにフィンランド社会が右傾化し、ソ連の敵として再度出現しつつあったことと密接に絡んでいるものと思われる。^①

① カレリア労働コミューンが、オロネツ県、アルハンゲリスク県の一部を切り離し、一一五、二〇〇km²の面積と二四三、〇〇〇人の人口で一九二〇年夏に形成されたとき、カレリア人が過半数（八五、五〇〇人、五九・八%）を占めていた（ロシア人は五四、七〇〇人で三八・三%、フィン人は九一九人で〇・六%）。さらに一九二二年、一九二三年と続けてロシア人が多数居住する周辺地域を加えて一九二三年夏にカレリア自治ソヴェエト社会主義共和国 КАСОР が形成され、さらに一九二四年にはレニングラード県よりフィン系のヴェブス人（九、〇〇〇人）が居住する地域が加えられた。かくして一九二四年末までに КАСОР の面積は一四六、三〇〇km²となり、以後一四年間この領域に変更は加えられなかった。人口は三三・三万人で、内訳はロシア人が五四%、カレリア人が四〇・六%、ヴェブス人が三八%、フィン人が〇・五%であり、ロシア人の比率がカレリア人を上回り過半数を握った。ロシア人が圧倒的多数を占める場所も中には存在した。次第にロシア人を中心とするスラブ系人口が優勢となっていく過程については詳しく触れられないが、次のタカラによる論文を参照のこと（Ирина Такала, Национальные операции ОГПУ/НКВД в Карелии, в указ. соч., В семье единой, с. 161-206.）。これらのデータの中にはエヌカヴェデが管轄するラーゲリや農業集団化で追放された農民を収

容する特殊村の住人は含まれていない。例えば一九三九年一月一日現在、ラーゲリに八三、八一〇人、特殊村に二八、〇八三人が存在した（там же, с. 166.）。

② Семю Таллука, Штрихи к этнической карте северо-запада России, в указ. соч., В семье единой, с. 42-65. 州の人口に市の人口は含まれていない。

③ Кипин, с. 55-58.

④ Там же, с. 55-73.

⑤ Там же, с. 73-76.

⑥ Там же, с. 77-80. カレリア住民にはいわゆる知識人の割合は少なく、党組織は一九二三年の段階でロシア人六四・五%、フィン人一九%、カレリア人一六%、その他が〇・五%を占めていた（一九二三年の第四回党協議会におけるヤルヴィサロの発言, Таллы национальной политики ЦК РКП. Четвертое совещание ЦК РКП с ответственными работниками национальных республик и областей в г. Москве 9-12 июня 1923г., Москва, 1992, с. 212. スタルツォフの論文からの発言を知った。 указ. соч., В семье единой, с. 91.）が、【表1】をみても、主としてフィンランドから亡命してきた「赤いフィン人」が多数を占めるフィン人が、一九二六年の時点では

も人口比率で〇・九%（一九二四年には〇・五%）しか存在しないことを考えると、いかにフィン人がカレリアで高い地位を占めていたかわかる。

⑦ Кипин, указ. соч., с. 81-87. フィン語で授業が行われていた学校の数は一九二五年の六三校（三〇・七%）から一九二九年の一八〇校（七二%）へ増加した。一九三一年には二七八の初頭、進中等学校がフィン語化した（там же, с. 143.）。その他の政策については, там же, с. 139-145.

⑧ В семье единой, указ. соч., с. 134, 135. 教育へのフィン語の導入は、フィン語から遠く南部カレリア住民の不満を呼んでいた（там же, с. 148, 175.）。

四 コレニザーツィア政策の終焉とカレリア、インゲルマンランドにおけるテロル

(一) インゲルマンランドにおける集団化、国境地帯からの追放策

インゲルマンランドでもカレリア同様、コレニザーツィア政策は実施されていたが、ここではその政策については詳しくは触れず、この政策が一九三〇年代に転換されていく過程を農業集団化と国境問題を背景に説明することにする。^⑩

一九二〇年代の末からソ連全土で推進された強制的農業集団化政策とそれに伴って実施された「階級としてのクラーク（富農）の絶滅」政策はインゲルマンランドにも及んだが、国境に隣接した少数民族地区であるという事情がおのずから影響を与えた。一九二九年一〇月四日、ロシア政府の人民委員会議は「レニングラード州、西部州の国境地帯居住住民の社会的に危険な分子を移住させることについて」布告を出した。そして集団化の最中の一九三〇年三月、レニングラード州党委員会は「国境地帯を強化するための方策」について検討し、「国境地帯からクラークを完全に除去する」ことを決

⑨ Кипин, указ. соч., с. 139.

⑩ Кангаспуо, указ. соч. В семье единой, с. 130, 24. 特に製材業のため北米のフィン系の熟練労働者を募集した。一九三二—三四年には二年契約で六、〇〇〇人がカレリアを訪れた（Такела, там же, с. 169.）。タカラは一九三〇—三四年に一・二万人以上がフィンランドからソ連へ非法法に入国したとする。三〇年代半ば、カレリアのフィン人は一・五万人で、三分の二はフィンランドからの移住者であった（там же, с. 170.）。

⑪ Кипин, указ. соч., с. 104-115. カレリアの経済発展策については, там же, с. 128-135.

定、「最も活発なクラーク分子」の追放は五月までに完了することとした。フィンランドと国境を接する北部インゲルマンランドに特に注目すると同時に、国境地区における統治機関の幹部一新も計画した。追放はフィンランド湾岸でも行われた。一九三二年一〇月までに西北部の国境地帯からは約二万人が追放されたとされる。②一九三一年四月二六日のイズヴェスチヤ紙が、インゲルマンランド人クラークの追放策について「この政策によつてフィンランドの攻撃的な反ソ分子が少なからぬ期待を込めているクラークの指導者が排除されることになる」と述べていた通り、③当局はフィンランドとフィン系住民の連携阻止をこの地域におけるクラーク排除に込めていたことがわかる。実際、一九二〇年代から三〇年代の初めにかけて、諜報データ収集のためにインゲルマンランド住人を利用することは秘密ではなかったという。ルパーソフらによれば、フィンランド中央刑事警察のフォンドには、密かに国境を越えたインゲルマンランド人がもたらした情報が、軍事諜報機関にとつて疑いなく関心を惹くものであったということを示す少なからぬ史料が存在するという。インゲルマンランド人が「フィンランド政権と協力し、彼らに部隊の配置や国境に建設された軍用倉庫についての軍事情報を提供している」ということが、ゲベウが行った集団逮捕の理由だと刑事警察自身がみなしていたという。④

レニングラード州に初めてフィン人のコルホーズが形成されたのは一九二九年春で、カナダからの亡命フィン人共産主義者によるものがそれに続いたが、他の民族同様彼らも集団化には不熱心だった。クラークに対する弾圧策は反革命の度合いから銃殺、遠隔地と域内の別の場所への追放とに区分されたが、レニングラード州の場合一九三〇—三一年に八、六〇四家族が追放された（コラ半島へ五、三四四、ウラルへ三三七、西シベリアへ一、二六九、東シベリアへ九二九、ヤクーチアへ七二五）。民族別のデータは存在しないようだが、インゲルマンランド委員会は八教区の一五九、五〇〇人のフィン人のうち一九三一年五月までに八、〇〇〇人が強制的に移住させられたと推定し、一九二九—三一年にレニングラード州で約四、三二〇のフィン人家族、約一八、〇〇〇人が追放されたとの別のデータもある（その半数は一九三二年二月の大規模な作戦によるもの）。レニングラード州からはシベリアへの追放が多かったが、一九三一年五月にはカザフスタンへ追放が予定されてい

た四、〇〇〇家族が、北部のコラ半島へ行く先を変えられた。主としてヒビノゴルスクのコンビナートでの労働に従事した。同時にフィン人の信仰するルター派教会への弾圧は、ロシア正教（フィン語系住民のうちイジヨラ人やヴォチ人らが信仰）同様強化され、反宗教活動も活発化した。一九三一—三七年にかけてはすべてのルター派教会は閉鎖されることになる。

隣国フィンランドではインゲルマンランドでの出来事は、インゲルマンランド・フィン人への抑圧と受け取られた。強制的集団化による弾圧を逃れてインゲルマンランドやカレリアからはフィンランドやエストニアへ三—四、〇〇〇人が避難した。フィンランドに存在するインゲルマンランド・フィン人とカレリア人の数が一九二七年から一九三四年にかけてそれぞれ、三、〇〇〇人から四、五四六人、五、〇〇〇人から六、七九一人へと増加している。インゲルマンランド人避難民の半分以上は隣のヴィボルグ・レーン「フィンランド側の行政単位」に居住していた。避難民は集団化の惨状を訴え、インゲルマンランド支援の諸団体は活発な反ソキャンペーンを展開し、それに対してソ連側が抗議した。その後インゲルマンランドからの強制移住は緩和され、一九三一—三四年に移住させられたのは一、〇〇〇人に過ぎない^⑤。集団化の結果、一九三六年一月時点でレニングラード州にはフィン人のコルホーズが五八〇存在したが、他の少数民族のコルホーズの数は、ヴェプス人一三七、エストニア人一三七、イジヨラ人五二、ラトヴィア人三三、ドイツ人二四、カレリア人二二であった^⑥。ラプア運動に見られるフィンランド社会の右傾化と、反ロシア主義者として有名なスヴィンフーヴドが一九三一年の大統領選挙で当選し、さらに一九三二年一月には国防評議会議長にマンネルヘイムが復活し、フィン関係は緊張したが、一九三二年に不可侵条約が締結されたことで一時小康状態を保っていた。ところが、一九三四年後半から両国関係は悪化し始める。一九三四年二月と一九三五年九月にマンネルヘイムがドイツを訪問しナチス幹部と会談したこともそれに拍車をかけた。一九三〇年代にはエストニアとフィンランドの軍事的協力関係も発展していた。ソ連のバルト艦隊をフィンランド湾に封鎖すべく、ポルカラ、タリン間に機雷敷設ラインを設定し、両地点の砲台を海底敷設ケーブルで接続して連係した砲撃を行うことについて参謀本部が協力し、共同演習も実行した^⑦。一九三四年二月、外務人民委員代理ストモニ

ヤコフは、西側隣接国の中でフィンランドが最もソ連に敵対的であるとし、フィンランドで「ファシストグループが活動を強め……極東における戦争にかけるか、依然としてソ連国内の反革命にかけるかしている」と発言していた。^⑥この緊張した国際関係も影響したものと考えられるが、一九三五年には国境地帯からの大規模な移住策がとられることになる。

周知の通り一九三四年二月にはレニングラード州党委員会トップで政治局員でもあったキーロフが暗殺され、これを利用した粛清が開始され、レニングラードでは帝政時代の貴族、企業家、役人、将校、聖職者、警察官など数千人が「旧体制人 (vrahine)」として追放されていたが、キーロフの後任ジダーノフは一九三五年三月スターリンに、逮捕を逃れレニングラード州、カレリアの国境地帯に隠れた旧体制人が少なくないと報告し、レニングラード州とカレリアの国境地帯の特別強化策をとるよう進言した。所属民族を理由に強制的に移住させることはソ連に限られたことなく、一九一九年にフィンランド内務省はロシアからの亡命者がヴィボルグや他の国境隣接地域に居住することを禁じ、彼らを内地へ移住させるよう指示を出したし、エストニア政府も一九二〇―三〇年代には住民構成を変えるべくロシア人漁民を移住させているが、ソ連ほど徹底して実行した国は他にない。^⑦一九三五年三月二五日、内務人民委員部レニングラード支部は内務人民委員ヤゴダより「レニングラード州とカレリアの国境地帯からクラークと反ソ分子を弾圧策として強制退去させる」方策について極秘命令を受けた。それにしたがってレニングラード当局は国境から二二キロの地帯でクラークと反ソ分子を排除する一連の決定を採択した。四月に作成したプランによれば国境地帯から一一、七九五人を排除することになっていた。五月には国境警備隊が発行する許可証の携帯をこの国境地帯で義務付ける制度を整え、レニングラード市と国境地帯ではパスポート体制「一九三三年より全土に順次導入された国内旅券、所持しないと移動できない。農民には発行されず」の厳格な施行により、市民権を剥奪された人や犯罪者からパスポートを取り上げ、彼らを遠ざける方策もとった。これらの一連の布告には民族的な性格は付与されていなかったが、ひとたび実行に移されると民族的性格を有するものとなった。第一段階の作戦は四月二五日までに終了し、当初の計画を一・五倍上回る五、一〇〇家族、計二二、五一一人が国境地帯から

強制移住させられた。うち「旧体制人」はわずか一〇一家族で、残りは農民であった。一年後の一九三六年四月にジダーノフはレニングラード党委員会でスターリンの発言を伝えている。「彼は本年予定されているプランでは二〇、〇〇〇人の移住を確保できないとして不満を述べた。この課題を政治的・軍事的問題として設定する必要があると述べた」「スターリン同志の狙いは、避難と軍事行動を展開するとき邪魔にならないよう、カレリア地峡を戦争が始まるまでに片付ける（очистить）ことにある。スターリン同志は二年間にカレリア地峡からの移住が完了されるべきであるとみなし、この問題の早急な組織化を要求している。移住自体は慎重に、かつ丁寧に行われるべきである。人々には我々はあなた方を追い出すのではなく、あなた方は要注意人物ではないと言わねばならない」。強制移住は一九三六年秋まで続き、住民は州の東部へ送られた。一九三五―三六年の二年間に強制移住させられたインゲルマンランド人の総数は二万六千から二万七千人で、うち七、〇〇〇人は一九三五年の四月に、残りの約二万人はそれ以後に実行されたとする研究者のデータがある。^⑧

同時期にバルト海沿岸のフィン系住民も同様に強制移住させられた。エストニアと接するレニングラード西部からはエストニア人が中央アジアへ強制移住させられた。総数二万人のエストニア人が弾圧を受けた。フィンランド湾沿岸に住み、漁業を営んでいたイジョラ人も漁に煩雑な許可を求められたことから、漁業を離れて都市での労働に従事せざるを得ず、急速に民族的アイデンティティを失っていった。一九三七年二月にモスクワを訪問したフィンランド外相ホルステイはフィン系住民への弾圧の中止を求めたが、リトヴィノフ外務人民委員は社会主義体制強化のためには、これらの地域から資本主義的要素を排除することは不可欠だと答え、ヴォロシロフ軍事人民委員もフィンランドは近い将来ファシストドイツの基地に十分なりうるので、国境地帯の強化は軍事的な必要性がもたらしたものだとして付け加えた。^⑨

一九二〇年代に一貫して行われていたコレニザーツィア政策も転換点を迎える。一九三〇年六月の第一六回党大会ではまだコレニザーツィアの重要性を訴えていたスターリンは、次の一九三四年一月の一七回党大会では地方の民族主義もロシアの大国主義的排外主義に劣らず危険であると発言するにいたる。例えば一九三〇年代初頭、文字を持たなかったイジ

ヨラ人やカレリア人、ヴェプス人、サーミ人「カレリアとフィンランド北部のいわゆるラップランドに居住」のために文字が作られ、教科書も作成されたように、公式にはコレニザーツィアは続いていた。一九三五年時点で、例えばフィン人のための小学校は二六七、準中等学校「七年」は四五、中等学校「二年」は一校レニングラード市と同州に存在していた（エストニア人の学校はそれぞれ九〇、一三、一、ヴェプス人の学校は五三、七、〇等^⑫）。それが一九三七年二月のレニングラード州党委員会の決定で民族学校が廃止され、ソヴィエト・タイプの学校、すなわちロシア語で授業を行う学校への転換がはかられていった。同時にフィン語劇場、フィン人教養の家、フィン語雑誌などが次々に閉鎖された。イジヨラ語、ヴェプス語の教育も禁止され教科書も没収された^⑬。ルター派教会の牧師の数はロシア・ソ連国内で減り続け（一九一七年一八三人、一九二二年八九人、一九三五年初め二四人、一九三六年夏二〇人）、一九三八年にレニングラードで最後に残ったルター派教会が閉鎖されると同時に牧師も姿を消した（フィンランドへ帰国するか逮捕された^⑭）。

一九三七年七月三〇日の秘密指令〇〇四四七は、人民の敵として旧クラーク、犯罪者、その他の反ソ分子の肅清に関して出され、大テロルを発動したのとして有名だが、最も危険とみなされた人民の敵は即時銃殺、第二カテゴリーには八一〇年の刑務所或いは収容所送りを定めていた。レニングラードでは一九三七年末までに二八、五八八人が逮捕され、一三、三八四人が銃殺され残りは刑務所、収容所送りとなった。肅清されたもののうち市内住民は約六、五〇〇人、市を除く州内で一八、〇〇〇人と農村部の比重が高いことがわかる。小規模化したものの一九三八年にも肅清は続いた。一九三九年一月一日現在、内務人民委員部の収容所には二、二八八人のフィン人が存在し、うち一四一人はフィンランド国籍を有していた^⑮。さらに、一九三七―三八年にはこの西北地域で逮捕者以外に二八、五〇〇人が域外へ追放された^⑯。こうしたカレリア地峡での「清掃」の結果、一九三九年六月、赤軍の参謀総長シャープシニコフはヴォロシロフに「移住の結果、カレリア強化地区のコンクリート帯には民間人が住んでいない」というまでになった。

一九三〇年代におけるフィン人の肅清の規模と犠牲者数については明確な答えは出されていない。一九三九年の国勢調

査によればレニングラード市に七、九二三人、その他の都市に六、三八八人、農村部に一〇〇、三三二人、計一二四、六三三人のフィン人がレニングラード州に居住していた。一九二〇年代後半のフィン人一四万―一五万人という数字が正しいとすれば、三万から三五、〇〇〇人の減少となり、人口の自然増を考慮すると強制移住やその他の形態の弾圧を被った人の数は三・五万から四万になるとムサーエフは推定している。^⑭

（二） カレリアの場合

カレリアでもレニングラード州同様、フィン系住民が弾圧された。一九三三年から三三年にかけてカレリアとインゲルマンランド・フィン人の居住するレニングラード州でオゲペウが「フィンランド参謀本部の陰謀」事件を捏造し、大規模な作戦を実行したことが明らかにされている。明らかにフィン系住民に狙いを定めて捏造された事件であった。一九三二年夏より逮捕が始まり、翌一九三三年五月までに計八六六人が逮捕され、うち七二七人が即決裁判を受けた。主として弾圧されたのは一九二―二二年のカレリアにおける蜂起に参加したカレリア人で、逮捕された七二七人のうちの五六一人（七七・二％）を占め、民族主義的偏向を非難された。うち五〇八名が「カレリア冒険主義」の参加者であった。一九三三年五月、この事件に関して七六名が銃殺され、二二三名は強制収容所へ一〇年収容されることになった（五年が一〇三名、三年が九三名）。一六八名は居住地より強制退去させられ、四七名はカレリア共和国での居住権を奪われた。^⑮別のデータによれば、二三の「反革命細胞」（カレリアで一五、インゲルマンランドで八）が壊滅され、カレリアで一、〇四八人、インゲルマンランドで三二〇人、計一、三五八人が逮捕された。一、三五八人のうち五七七人がスパイ活動家とみなされた。活動家に課せられたのは、一、カレリア、インゲルマンランドで反革命分子を自らの影響力のもとに置くこと、二、「大フィンランド」のスローガンのもと民族排外主義的なアジテーション、プロバガンダを体系的に行うこと、三、反革命的な雰囲気を最大限かもし出すべく条件を整えること、四、すべての州の農業、林業で組織的な破壊活動を実行すること、五、ソ連と

の戦争は近く、ソ連が間違はなく敗北し、カレリアとインゲルマンランド地区はフィンランドに併合されとの噂を根強く流すこと、六、フィンランドの有利になるようなスパイ活動を広汎に実行すること、七、ソヴィエトの党や一般の活動家に対する末端でのテロルを組織すること、八、反革命のリーダーを募り、教育すること……などであった。^⑮ 軍事的な観点から国境付近に展開する部隊に少数民族出身者が勤務することも望ましくないとみなされていた。日付は定かではないが、レニングラード軍管区の参謀部は「ラトヴィア人、フィン人、エストニア人は国境から離れた大駐屯地に配置する」よう指示を出していた。^⑯ 一九三五年にレニングラード州で実施された国境二三キロゾーンからの追放措置も、レニングラードからカレリアを訪れた特別委員会が実施に移し、西シベリアへ二九六家族一、五四六人（計画では三〇八家族、一、六一八人）が追放された。さらに追放される運命にあったのは革命後一貫してカレリアの指導にあたっていたギューリングラ「赤いフィン人」であった。労働者として北米やトヴェリのフィン人の採用に熱心であったこと、カレリア人の幹部を採用しなかったこと、経済政策の失敗などが槍玉に挙げられ解任された。^⑰

一九三七―三八年の弾圧はカレリアも同様で民族的な選別が色濃く反映している。一九三七年から一九三八年末にかけて、司法当局によらず逮捕され裁かれた一一、三四一人のうち、フィン人は四、六八八人を占め、共和国内で人口の三％を占めるに過ぎなかったフィン人が、割合では全体の四〇％（カレリア人二七％、ロシア人二五％）を占めることになった。^⑱ 一九三〇年代後半に肅清されたフィン人は合計で三、〇〇〇人から三、五〇〇人に上ったとされる。

レニングラード州同様、一九三七年から三八年にかけてカレリアでもフィン化は停止された。初頭学校ではカレリア語教育に切り替わり、高学年ではロシア語に切り替えられた。一九三八年一月からカレリアでは教育、出版、文化活動でフィン語の使用が停止された。一方でカレリア化の主唱者であった学者ブリフが一九三八年一月に逮捕され、カレリア化も停止されることになる。^⑲

① Mycaen, ykaz. co4., c. 172-217 カレリアにおける集団化について

は詳しく述べてない。前掲拙稿を参照のこと。

- ② Мусаев, указ. соч., с. 256. *В семье единой*, с. 31.
- ③ Мусаев, указ. соч., с. 253.
- ④ Руписов, Чистиков, указ. соч., *Советско-финляндская граница*, с. 146.
- ⑤ Мусаев, указ. соч., с. 218-246. Указ. соч., *В семье единой*, с. 72-73.
- ⑥ Мусаев, указ. соч., с. 250.
- ⑦ Jari Leskinen, The silenced bridge of Finland. Secret military cooperation between Finland and Estonia against Soviet Union, 1930-1939, в указ. соч., *Россия и Финляндия в XX веке*, с. 116-128.
- ⑧ Кипин, указ. соч., с. 147. 極東に於て滿州事変後「滿州国」を樹立した日本は「ソ連を逐く」の期待を意味している。
- ⑨ Мусаев, указ. соч., с. 257.
- ⑩ Там же, с. 257-260. 一九三五年以降に強制移住せられた人の大部分は「一九三〇—三三年にクラークとして追放され故郷へ戻つて来た人々であった」。Стархов, указ. соч., *В семье единой*, с. 95.
- ⑪ Мусаев, указ. соч., с. 262.
- ⑫ Там же, с. 247-248.
- ⑬ Там же, с. 263-268. Финляндияの革命後の發刊とその閉鎖に「フィン」Мусаев В.И., Финская печать в Петрограде/Ленинграде в 1920-1930-е гг., в указ. соч., *Санкт-Петербург-Хельсинки. Хельсинки-Санкт-Петербург*, с. 119-123.
- ⑭ Мусаев, указ. соч., с. 272-276.
- ⑮ ГУЛАГ.1918-1960гг., с. 416-417. 一九三八年一月三十一日の政治局會議は「内務人民委員部に対し、四月二十五日まで、外国人、ソ連国民であることを問わずポーランド人、ラトヴィア人、ドイツ人、エストニア人、フィン人、ギリシヤ人、イラン人、ハルビン人「一九三五年の滿州国への中東鐵道売却以後、ソ連に帰国した同鐵道職員とその家族」、中国人、ルーマニア人からなるスパイ・破壊活動分子の壊滅作戰を実行する」ことを許可した。Мусаев, указ. соч., с. 270-271.
- ⑯ Мусаев, указ. соч., с. 271.
- ⑰ Там же, с. 276. 五一六万が弾圧され、その四分の一が死亡したとする推定もある。
- ⑱ Кипин, указ. соч., с. 9, 146. キーリンが依拠しているのは「カリヤ共和国のKGB史料を使用してレフホヴァが書いた次の論文であるが筆者は未見である」(Репухова О. Ю., Дело о «контрреволюционном заговоре» в Карелии в 1932-1933гг. («Заговор финского гештапа»), *Политическая история и историография (от античности до современности)*: Сб. науч. ст. Вып. II. Петрозаводск, 1996, с. 85-99.
- ⑲ Указ. соч., *В семье единой*, с. 176-179. 一九五六—六二年にこの「事件」に関して北部軍管区の軍法會議が再検討し、まったくの虚構であると断定した。この事件とは同時に同様の事件が捏造されてくる。一九三二年五月ウドムルト自治州イジェフスクでオケベウが「フィンランドを後見にマリ、モルドヴァ、カレリア、コミをソ連から離脱させ、フィン・ウゴル連邦を設立させようとする」「反革命的民族排外主義的」な「フィン民族解放連盟 Союз освобожденный финских народностей」なるものに属する者たるメンバーを摘発した。この問題については「К.И. Куликов, Дело «СОФИН», Ижевск, 1997, А.И. Терюков, Дело «СОФИН» и советско-финляндские отношения в конце 1920-х - начале 1930-х гг., в указ. соч., *Россия и Финляндия в XX веке*, с. 223-231. など参考のこと。
- ⑳ Мусаев, указ. соч., с. 253.

②① Кишин, указ. соф., с. 148-149.

②② В свете единой, указ. соф., с. 182-199.

②③ Кишин, указ. соф., с. 153-154.

おわりに

ソ連は多数の国と国境線を接しており、地域によって地理的条件や交通、国境を挟んで対峙する住民の構成、宗教、隣接国との外交的つながりの濃淡、隣接国における共産党の存在やその活動の強弱など様々に状況が異なっている。本論が対フィンランド国境というテーマで概観したとおり、戦間期については一九二〇年代のコレニザーツィアの実施、一九三〇年代のその停止と国境周辺民族の追放、肅清というパターンはどの国境地帯においてもある程度当てはまるのではないかと考える。カレリア、インゲルマンランドの例で見たとおり、ロシア帝国崩壊から内戦が終結する時期に国境隣接地域がどのように対応したのか、反ソヴィエト分子がその後も国境を挟んでどまっていなかったという問題は、コレニザーツィアを実施していた一九二〇年代においてもずっとソ連当局の念頭にあったと考えられ、一九三〇年代の極端な国境「清掃」作業を実行する上で大きな影響を及ぼしたのは明らかであろう。いずれの国においても国防上、外敵、異分子の侵入を防ぐという意味で国境に重点をおくのはいうまでもないが、資本主義国による「包囲」下にあり、緩衝地帯なき戦間期のソ連における国境への関心の持ち方は異常なほど高かったといえるのではなからうか。各国境地帯によって史料の刊行の度合いや、その質の高低、研究の進度に違いはあるだろうが、スターリン体制の解明を進めるためにも、国境をキーワードにさらに研究を進めていく必要があるであろう。

Stalin's Ethnic Policies in the Northwestern Region of the Soviet Union during the Interwar Period: Finland, Leningrad, and Karelia

by

TERAYAMA Kyosuke

The Soviet leadership of the interwar period was tied to the conception that the Soviet Union was surrounded by anti-Soviet capitalist countries, with the exception of a few satellite regions such as Mongolia, Chinese Sinkiang, etc. By focusing on the northwestern region of the Soviet Union, which was historically inhabited by Finnish people (Finn, Karelian etc.), and bordered Finland, which is one of these "surrounding" countries, this thesis clarifies Stalinist ethnic policies toward these minority peoples. Given the "surrounded" situation during the interwar period, Stalin was extremely cautious about the borderland regions on the grounds that it was very easy for all sorts of negative ideological, material and human elements to intrude into the Soviet Union with the help of the ethnic groups that resided on both sides of these borders. Therefore, to guard against the invasion of these negative factors, the Stalinist leadership instituted very severe policies, including forced resettlement in distant places, toward the borderland minorities; measures that were much harsher than those imposed on the residents of the interior. The ethnic minorities on the borderland region with Finland were not an exception.

Historically Finland and Karelia were places where Russia and Sweden had long struggled over their spheres of influence. In the 13th century, the borders between Sweden, Finland and Russia were settled for the first time, and the Karelian people east of the Finnish-Russian border became Orthodox believers. At the beginning of the 17th century Sweden succeeded in gaining possession of the Karelian Isthmus, the south coast of the Gulf of Finland, and the mouth of Neva River. It named this region Ingria (Ingermanland) and started to settle the area with Lutheran Finns from Finland. Recognizing the strategic importance of this region, Peter the Great triumphed over Sweden at the beginning of the 18th century and started construction of St. Petersburg. This city became not only the center of Ingermanland prefecture (which existed for only two years, and later became St. Petersburg prefecture), but also the new capital of the Russian Empire. The Russification of this region went on and in the second half of the 18th century the

number of Russians surpassed the number of Finnish people. At the end of 19th century the Finnish people, together with the Estonians, occupied only 10% of the prefecture's residents. But in Karelia, native Karelians continued to be the majority.

Due to the publishing of the old Kalerian national epic, the Kalevala, collected in Russian Karelia by Finnish folklorists, the Finnish nationalist dream of integrating all Finnish people under Finnish rule spread widely during the 19th century. After the Russian Revolution, the Grand Duchy of Finland, which had been under the control of the Russian empire since the beginning of 19th century, gained its independence. The Finnish government, spurred on by this Finnish nationalism, tried to enlarge its territory at the expense of Russian Karelia and the Karelian Isthmus, which had fallen into confusion after the collapse of Russian Empire. But the Finnish army, dispatched to Karelia, was beaten by the Red Army and could not win the sympathy of the local residents. In consequence, the Tartu treaty of 1920 was concluded between the Soviet Russia and Finland, and the latter acquired only the Petsamo region—an exit to the North Sea. This was the first time in Finish history that Finnish sovereignty was extended to the area and it lasted for only about 20 years.

In the era of the NEP in the 1920s, the Soviet government promoted the *korenizatsia* policy (respect for local national cultures and national languages) in the regions of non-Russian nationalities, and for the Finnish peoples in Karelia and the Leningrad oblast' localization of linguistic policy was introduced to some extent. But the memory of attack and invasion into Karelia by Finnish nationalists had not vanished from Stalin's memory. In the 1930s, as the military menace grew, especially after the emergence of Nazi Germany, the *korenizatsia* policy was abolished and Russification was enforced widely in the Soviet Union. In Karelia and the Leningrad oblast' the Finnish peoples were harshly suppressed solely on the basis of their ethnic background during the period of the approach of the war, because they were considered to be potential collaborators with an enemy of the Soviet Union, Finland, where their ethnic relatives, the Finns, lived.